

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

For Professor Haruhiko Sato : in honor of his retirement

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山川, 英彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/420">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/420</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 佐藤晴彦教授を送る

山 川 英 彦

佐藤晴彦教授が2010年3月31日をもって定年退官された。神戸外大の教壇に立たれること29年。その間に教えを受けた学生はゆうに1,200人を超える。

佐藤先生は1982年4月1日に太田辰夫先生の後任として本学に赴任された。太田先生は中国語歴史文法研究の大家であったことから、後任は当然のことながら歴史文法の研究者と思っていた。ところが当時中国学科にはもうお一人文法研究をされていた方がおられたので、今回は文法研究者は採用しないという意見が出された。しかしその方は文法研究をされているとはいえ歴史文法ではなかったことから、私は外大としては歴史文法の伝統を守るためにも歴史文法研究者を採るべきと縷々お話しし、最終的にこの方針で人事に臨むことで意見の一致を見た。当時は現在とは異なり、公開公募は稀で、学科内で一人を推薦してその候補者を審査するというのが普通の人事の進め方だった。外大に赴任することを承諾してもらえそうな歴史文法研究者一人を学科で推薦するとなれば佐藤先生しかない、研究も人物も申し分ない、ということで候補者はすんなりと決まった。学内の手続きも順調に進み、そろそろ先方の大学に正式にお話しする段階になったが、どうも先方の大学で話が進んでいないようである。焦ったO先生がある朝、午前9時前であったと思う、電話を掛けてこられ、話が進まないのだからこれから先方の責任者に電話するといわれる。困った私はO先生に待っていただくようお願いし、すぐさま佐藤先生に連絡を取った。あいにくその日は自宅にはおられず、出先まで電話を掛けて状況を説明し、直ちにO先生に連絡をとっていただくよ

うにお願いし、その結果O先生も今しばらく待ちましようといわれ、事なきを得、その後は順調に手続きが行われて本学にお迎えすることができた。すでに30年の時が過ぎ、もう時効であろうと思ひここに記した。

研究面の功績はここでは多くは語らない。研究業績表をご覧いただければ分かることである。恩師太田辰夫先生の後を継ぎ、白話語法研究の分野で新しい研究法を編み出し、確固たる地位を築かれたこと、研究論文だけでなく、中国語の教科書や文法書も多数執筆され、外大の中国語教育だけでなく日本の中国語教育に貢献されたことを記すに留める。

佐藤先生は外大に赴任されると、そのむかし坂本一郎先生がされていたと同じように、1年生のために早朝の練習を開始された。授業開始前の約30分間、専攻中国語の授業がある月・水・金の毎日、教室で発音練習を中心に学生を指導された。一時期中断していたこともあるが、現在も引き続き行われており、熱心な指導が行われている。このように佐藤先生は坂本先生と同じように学生を指導され、神戸外大の教育面での伝統も引き継がれた。

そのほかにも夏休みに何日間か中国語学習のために合宿することも計画され、毎年あちこち場所を変えて合宿が行われた。私も一度だけお手伝いで参加したことがある。場所は神戸電鉄道場駅からバスに乗って20分か30分かかるところで、合宿途中で学生が脱走しようと考えても到底不可能な山中にある「関西学生セミナーハウス」。周囲は山また山で、娯楽も何もないところであった。教員は佐藤先生と私、それに佐藤先生の知人の中国人の先生がお二人参加されていた。お二人とも若い女性で、他の合宿の参加者からは羨望の目で見られていたと思う。スケジュールを決めて朝から晩まで中国語にどっぷり漬かる毎日が4日続くと、学習する方も大変であるが、指導する方もそれに劣らず大変だった。先日引き出しの中を整理しているとその合宿の時の写真が出てきた。佐藤先生はランニングシャツに短パン、サンダルという格好で、お互いあの頃は若かったなと懐かしかった。

毎日の学習だけでなく、学生たちが中国語のスピーチコンテストに参加す

るような場合にも親身になって指導された。発表原稿作成の段階から熱心に指導され、スピーチも正確な発音を目指すだけでなく、抑揚や身振り手振りも細かく指導され、その結果近年毎年のように各種コンテストで優勝者が続出している。そのお陰で神戸外大中国学科の名は全国に知れ渡り、全国各地から受験生が集まって優秀な学生が入学し、またすばらしい成果をあげるという好ましい循環になっている。

順調なことばかりではなかった。恩師の坂本一郎先生や太田辰夫先生がお亡くなりになるなど佐藤先生にとって精神的に辛いことが続いたこともあったが、一歩も止まることなく常に前進されていたことが強く印象に残っている。

六甲に学舎があった頃、私は一駅手前の御影駅で下車し、六甲病院の横を通り大学まで歩いていた。登りの坂道ではあったが季節のよいときは六甲山を望み、住宅に植えられた草花を眺め、結構楽しかった。御影駅で下車するときに時々佐藤先生と一緒にすることがあったが、駅からランニングシューズに履き替え、なんとあの坂道を走って行かれた。身体を鍛えるためとのことであったが、私にはとても真似はできなかった。

佐藤先生が退官される1年前、大学が法人化されるとともに特任教授の制度が導入された。在職中に教育研究の両面で大きな成果を残した教員に定年後も引き続き教壇に立って外大の教育に貢献していただくという制度である。その第1号の特任教授として外大のためにいま少し頑張っていたきたいとお願いしたところご快諾いただき、現在も引き続き学生の指導に当たっていただいている。これからもご健康で、研究に、また学生の教育に頑張ってくださいことを心から願っている。